

生きる 狩野博美



米国ナショナル・ジオグラフィック主催
トラベル・フォトグラファー・
オブ・ザ・イヤー2017 自然部門第2位

Kano Hiromi

1975年9月2日、迫町表前生まれの42歳。米谷工高(現登米総合産業高)卒業後、神奈川県川崎市の自動車関連会社へ就職。2007年に帰郷し、11年から写真を始め。現在は、東北地方環境事務所の非常勤職員として、湖沼群や鳥獣の調査を手掛けている。趣味は山登り。



受賞作品「To live」

天 変な時期もあったけど、あきらめないでよかった。やっと自分の足で歩けた気がする」とほほを緩めます。

米国の月刊誌ナショナル・ジオグラフィック(以下、ナショナル)が主催するフォトコンテスト「トラベル・フォトグラファー・オブ・ザ・イヤー2017」の自然部門で、狩野さんの作品が2位に輝いた。

作品のタイトルは「To live(生きる)」。大崎市の蕪栗沼で、ハクチョウが一緒に飛び立つ瞬間を捉えた。狩野さんは「地球は人間の開発で、野鳥も過ごしづらい環境になっている。人間のエゴに踊らされながらも『生きる』ハクチョウの力強さを表現した」と話す。

ナショナルは1888年に創刊。野生動物の生態や地球環境の未来など、「地球を知る雑誌」。世界36カ国で発行され、850万人が購読している。同誌に掲載される写真は、常に最高水準。写真家が撮影してきた大量の写真から、掲載されるのは1万枚のうち1、2枚程度といわれている。同コンテストは2006年から開催され、世界一人気があり、有名と言っても過言ではない。プロアマ問わず、入賞を目標にしている写真家は少ない。

今 回は「自然」「人々」「都市」の3部門に、世界30カ国以上から合計1万5千点を超す応募があった。これまでの日本人受賞者は6人。狩野

さんは、日本人で7人目の快挙を成し遂げた。

高校卒業後、川崎市の自動車関連会社に勤務していたが、体調を崩したこともあり、07年に退職、帰郷した。帰郷から3年、体調が回復した頃「目標を持って何かに取り組みたい」と一眼レフカメラとアップル社のパソコンを購入。「それまで、自分の意思で人生を歩んでいなかった。人生を左右する就職先も、前の席に座る同級生が選んだもの。それに合わせてただだった」。

パ ソコンに電源を入れると、初雪が降る青い池の画像に目を奪われた。撮影者は「ケント白石」。日本人で初めて、ナショナルフォトコンテストに入賞、アップル社に画像を採用された写真家だ。「運命」を感じ、ナショナル入賞を目標に、風景写真を撮り始めた。

撮影技術は全て独学。インターネットで技術を学び、ナショナル写真集やホームページを見て、イメージを作り、シャッターを切った。試行錯誤し2年が過ぎた頃、「写真に深みがない」と感じた。どんなにきれいで印象的でも、撮影者の「思い」や「物語」がなければ、深みは生まれなない。「写真で一番大切なものを見落とす世界に誇る伊豆沼に足を運んだ」。

伊豆沼に通い、沼や冬鳥の周辺環境、時代背景や現状を徹底的に調べ

た。足しげく通ううちに、宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団の嶋田哲郎博士と親しくなった。嶋田博士に「ナショナルを目指す」と話したところ、「美しいだけが写真ではない」と言われ、その意味を自問自答。「傍目には優雅に見えるハクチョウやマガンも、生きるために伊豆沼で冬を越す。見た目ではなく、彼らの本質に目を向けるようになった」

冬 鳥が伊豆沼に訪れ、シベリアに撮影に出向く。1、2月は寒さが一番厳しい時期。気温が、マイナス20度以下になることも珍しくない。極寒の中、5、6時間滞在し、1、2度しかシャッターを切らないこともある。「写真を、イメージ通り仕上げるには、最高の一瞬を逃さないこと。そのために待つのは、つらいと思わない。好きで続けていることだし、自分で決めたこと。やりたいことや目標があるのは幸せなこと」にっこり。

体調が優れない時期「存在する意味があるのか」と思った。「センスがない」と言われたこともあった。しかし、ケント白石、嶋田博士や多くの人たちとの出会い、目標への思いの強さが受賞につながった。「目標を持ち、自分の足で歩くことのすばらしさを教えてくれた写真と冬鳥、支えてくれた人たちに感謝している。写真を通じて恩返しをしたい」。狩野さんは、今日もファイナダー越しに命と向き合っている。